

編集後記

今月の特集は「右脳、左脳とリハビリテーション」である。このテーマは現在、脳疾患のリハビリテーションにおいて極めて大きな関心を集めているものの一つである。

本特集において、河内氏は「左右大脳半球の機能分化」と題して、この問題の歴史的な発展過程を述べた後、最新の知見として、右半球と言語機能の問題、さらに、左右半球面の構造上の差異等の興味ある知見を紹介された。宮森氏は「右脳損傷とリハビリテーション」と題して、よく知られている半側空間無視以外に、右半球と運動・行為の障害、コミュニケーションの障害、行動の特徴等について述べたが、これらは左片麻痺患者にリハの場で接する際に大いに参考になる知見であると思われる。伊藤氏は「左脳損傷とリハビリテーション」と題して、失語症に対する新しいアプローチである PACE (Promoting Aphasics' Communicative Effectiveness) を紹介された。5 症例における実際のやりとりを通して極めてわかり易い解説となり、PACE の理解を深めることに役立つものと思われる。従来の Schuell の刺激法一辺倒の失語症治療に新たな治療法が導入されたわけで、今後の成果が大いに期待される。畑・

鈴木氏は「離断症候群とリハビリテーション」と題して、半球間離断症候を詳しく解説され、さらに一症例を呈示して、リハに際して注意すべきいくつかの問題点を指摘された。それにしても、CT では必ずしも十分には描写されない脳梁の病変が、MRI では何と鮮やかに描出されることか。今後、この分野における大きな発展が期待される次第である。

巻頭言で才藤氏は、リハ医療におけるチームワークと、リハ医のリーダーシップの重要性から、リハ医教育に「対人関係技術を含む社会心理学的観点」に関する教育の導入を提言された。

講座は江藤氏の末梢神経障害のリハと、宮原氏のリハのための統計学、一頁講座は盛合氏の骨格構造義手の処方であり、いずれもたいへん有益なものである。宮原氏の講座はかなり難解だが何とかついていけそうである。

研究と報告は原田氏等と高浜氏等の 2 篇、症例報告は原氏等、調査は久力氏等から報告されている。いずれも興味ある論文である。今後ともこれらの欄に、諸兄が積極的に応募されることを期待してやまな

(横山 巖)

総合リハビリテーション (第16巻 第11号)

1988年11月10日発行 (毎月 1 回10日発行)

1 部定価 1,750円 (配送料60円)

(年ぎめ予約購読料 19,560円)
(送料弊社負担)

発行 株式会社 医学書院

代表者 金原 優

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 社内案内 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5704

(担当: 山田・細田)

販売部直通 (03) 817-5659・5660

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 三報社印刷(株): 電話 (03) 637-0005

広告申込所 (株)東広社: 電話 (03) 409-8803

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一郎
五 味 重 春
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 歆
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 罔 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku Tokyo © 1988, Printed in Japan.
本誌の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。